

『今月の天候と農作業』

通巻第5675号
5月号
令和5年4月27日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。

【予報のポイント】

向こう1か月の気温は、暖かい空気が流れ込みやすいため高く、特に期間の前半はかなり高くなる可能性があります。期間の前半を中心に気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	30	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は天気は数日の周期で変わらるでしょう。平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

<1週目の予報> 4月29日(土)～ 5月5日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、期間のはじめは、低気圧や前線の影響で雨の降る日があるでしょう。

<2週目の予報> 5月6日(土)～ 5月12日(金)

気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3週目から4週目の予報> 5月13日(土)～ 5月26日(金)

天気は数日の周期で変わらるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稲

1 水管理と病害虫防除

株当たり20本程度の茎数を確保したら、無効茎抑制や根の健全化、倒伏軽減のために「中干し」を行いましょう。

5～7日程度を目安に、軽く足跡が付く程度に干します。

「いもち病」の予察情報に注意しましょう。特に、気温が25℃前後で、曇りや雨が続くと、発病が早まり、病害が多発する恐れがあるので、ほ場をこまめに観察して、病害の早期発見に努めましょう。

2 穂肥

今月末から6月上旬が穂肥の時期です。コシヒカリは、幼穂長が1cmの時期を目安に、葉色を確認して施用しましょう。基肥一発タイプの肥料を施用している場合、穂肥は不要です。

◆普通期水稲

1 田植時期と土づくり

ヒノヒカリは早植すると出穂が早くなり、高温障害により、品質が低下することから、極端な早植は避けましょう。また、品質や収量向上のためには土づくりが大切です。深耕の実施やケイ酸質資材や有機物を施用しましょう。

2 育苗管理と田植え

塩水選後「ばか苗病」等の防除のため種子消毒を行います。

芽の長さ1cm程度を目安に、緑化に移し、その後は、ハウス内が高温や高湿にならないよう注意しましょう。

田植時には、いもち病やウンカ類等の防除のために、薬剤の箱処理を行いましょう。

◆麦類

1 収穫作業

成熟期の目安は穂首が黄化し、穀粒からも緑色が抜け、爪を立てるとロウくらいの硬さになった頃です。コンバイン収穫の場合は、その数日後（水分30%以下）に収穫します。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆きゅうり

日中の気温上昇と、日射量の増加に応じてかん水量を増やします。また、葉に強い直射日光が当たると、葉の老化や葉焼け症等が発生するため、日中は内張カーテン等を利用して日射量を調節します。ハウス内の湿度低下は、曲がり果や尻細果等の発生につながるため、乾燥している場合には、通路散水等による湿度確保に努めます。

◆ピーマン

夜温が高くなり、暖房機が稼働しない日が続くと、ハウス内の湿度が高まり病害が発生しやすくなるため、湿度管理を行います。また、日焼け果等の発生防止のため、日中は内張カーテン等を利用して、日射量を調節するとともに、換気により、ハウス内の温度は30℃以下で管理します。

茎葉が繁茂し、光線の透過不足等による白果や収穫遅れによる赤果の発生を防ぐため適期収穫を徹底し、光線を遮っている茎葉の整枝・せん定を行います。

◆トマト

ミニトマトは、気温上昇に伴い裂果が多くなるため、日射量や翌日の天候を考慮したかん水を行います。また、ハウス内の湿度を下げるために日中の換気を徹底し、収穫遅れがないよう適期収穫を行います。

大玉トマトは、高温の乾燥により尻腐果の発生が多くなるため、かん水量を徐々に増やします。また、草勢が低下すると小玉果となり、軟果玉や裂果が発生するため、追肥が遅れないようにしましょう。

◆いちご

収穫も終盤となり、次年度用の育苗を始めます。特に、炭疽病の発生等による苗不足を避けるため、炭疽病に感染していない健全な親株を使用します。感染の疑いのある苗は周囲の苗も含め早期に除去・処分するなど、万全の対策を実施します。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

◆共通（排水対策）

6月には梅雨期を迎えるため、5月中に、ほ場内外の排水路の整備・点検を行いましょう。ほ場に設ける排水溝は、確実に排水口につなげます。排水口側の枕畝は設置しないことが望ましいですが、設置する場合には、枕畝に排水溝を設けましょう。

◆かんしょ

普通栽培の植付け期です。植付けは、なるべく曇天日や夕方、降雨前を選んで行い、苗のしおれや葉の傷みを防ぎ、活着を促します。採苗は植付け予定の3～5日前の午後に行います。苗は地際から5cm以上離して切り取ると、病害回避に有効です。病害防止のため、植付け前までに農薬で苗全体が浸漬されるように処理をしますが、薬液は必ず使用する当日に調製しましょう。また、処理後は、温湿度を保ち数日保管すると発根が良くなります。

育苗床や本ぼにおいて、地際部の茎の黒変や芋の腐敗が見られたらサツマイモ基腐病の可能性が高いため、速やかに除去します。その際は、他の株との接触を避けるため、抜き取った株は速やかに肥料袋などに入れます。株を除去した周辺の株は予防のため銅剤で防除します。

◆ さといも

出芽が揃う時期です。5月までに出る芽は親芋から出た芽のため、2本以上出ている株は、大きい芽を1本のみ残し、他はかき取ります。また、ほ場が乾燥すると生育が遅れるため、かん水を行い、生育を促します。

茎葉に赤褐色の斑点が出始めたら疫病対策の防除を開始し、新葉が展開する毎に農薬散布を行います。また、梅雨に入る前には必ず防除します。

(川崎 佳栄)

果樹

◆ かんきつ全般

今年の発芽日および満開日は平年より早い予想となっています。園地や樹によってばらつきがありますが、着花量は多く、新梢は少ない表年傾向です。花肥の施肥など、着花や新梢の状況に合わせて今後の管理を行きましょう。

極早生温州みかんの火山灰土壌マルチ栽培では、5月下旬からマルチ被覆の時期になります。園地周辺からの雨水の浸入を防止し、水はけの良い条件を確保します。また、過乾燥や減酸対策としてかん水施設を設置しましょう。

◆ 完熟きんかん

結果枝の充実を促進するため、窒素主体の葉散布やたっぷりのかん水を行います。

5月中旬から下旬に発根促進剤と尿素を土壌かん注することで、1番果の結果安定が図られます。具体的な方法については、普及センターやJAに相談しましょう。

◆ マンゴー

5月から6月にかけて出荷最盛期を迎えます。収穫が近づくにつれて果皮が弱くなるため、高湿度や果実結露による「やに果」や病気の発生が増加してきます。ハウス内の急激な温度変化を防ぎ、こまめな換気やヒートポンプによる除湿を行い、果実の結露を防止するとともに、病害対策を徹底します。また、内カーテンや遮光ネットを利用し、果実の日焼けを防止しましょう。事故果の発生は産地の信頼を著しく低下させます。引き続き、適正な収穫・出荷作業を徹底しましょう。

◆ ブドウ

この時期は生育ステージに応じて、花穂整形やジベレリン処理などの作業を行います。

花穂整形は房型を整え、養分競合による花振るいを防ぐ大切な作業です。品種ごとの基準どおりに行いましょう。

(黒木 宏憲)

花き

◆夏秋ギク

各種作業や電照管理については、作型に応じて計画的に行いましょう。なお、再電照開始時期については、事前に花芽検鏡を行った上で決定します。

「精の一世」は、消灯後は完全シェードの11時間日長で管理します。7月出荷作型は幼若性を獲得する恐れがあるため、消灯前は12℃程度、消灯後は18℃程度の夜温を確保しましょう。

◆秋ギク

採種用親株の挿し芽は、作型と穂冷蔵の有無を考慮し、所要日数を計算して計画的に作業を進めます。

キクの腋芽は高温で消失しやすくなるため、腋芽の伸びにくい品種・系統は親株床をできるだけ涼しくし、必要に応じてBA剤を散布しましょう。

◆スイートピー

種子の肥大を促すために、採種までは定期的にかん水及び液肥施用を行うとともに、殺菌剤を散布して灰色かび病による株の枯死防止に努めます。

受粉後45日程度が経過し、莢の色が緑色から褐色に変わってきたら採種を行います。収穫した莢は風通しの良い日陰で乾燥させ、取り出した種子は大きさによる選別後、殺菌剤を粉衣し冷暗所で貯蔵します。

◆ホオズキ

結実時期です。着果不良の原因になるため、ハウス内の温度管理に注意しましょう。

また、7月出荷作型の防除については、6月上旬の着色処理前に実施します。

◆ラナンキュラス

球根掘り上げ時期です。

地上部が8割程度黄化した時点が目安です。その際、罹病株の球根は掘り上げないようにします。掘り上げ後は洗浄・分球・ひげ根除去を丁寧に行い、殺菌剤による消毒後、十分に乾燥させます。乾燥後の球根は容器内に乾燥剤を入れて保管します。

◆シキミ

春芽の伸長から硬化時期です。黒しみ斑点病・サビダニ類の防除が重要な時期となります。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

国内での発生が過去最多となっている鳥インフルエンザは、4月以降も国内での感染が確認されており、引き続き県内での発生リスクが高い状況が続いています。農場を守るために、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準に基づく対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

気候が安定し、家畜の生産性が向上する時期ですが、日中に気温が上昇するため、温湿度環境を見ながら、細霧装置のこまめな稼働や換気対策等を徹底しましょう。

特に乳牛は、ヒトが不快さを感じない温湿度域でも暑熱ストレスの影響を受けるため、注意が必要です。ヒートストレスメーターで温湿度を確認しながら必要な対策を行いましょう。

◆飼料作物

今月は飼料用イネやとうもろこし・ソルガム等の作付け時期です。栄養価の高い飼料作物を栽培するために、土壌分析結果に基づく適正な施肥管理を行いましょう。

また、イタリアンライグラスの収穫時期となりますので、適期である出穂期に収穫・調整を行い、品質の高い自給飼料を確保しましょう。

(小田 弥生)

特用作物

◆茶

1 摘採と整枝

二番茶を摘採する茶園では、芽揃いを良くするため、一番茶の摘採7～15日後頃を目途に整枝を実施します。

2 茶園の更新

樹高が高く、枝条が細くなった茶園は更新が必要です。中切りは、一番茶直後が望ましく、中切り位置は高さ40～50cm、枝幹の太さ6～8mmの位置を目安に実施します。中切り作業は、樹体の日焼け防止のため数回(5～7日おき)に分けて行いましょう。また、できるだけ曇雨天日を選んで行うと樹体への影響を軽減できます。

3 病虫害防除と施肥

クワシロカイガラムシの防除を行う場合は、幼虫の初発を確認して10～14日後頃が防除適期となるため、ふ化状況を見ながら、散布ムラのないよう丁寧に薬剤を散布しましょう。特に、雄繭が目立ち枝枯れが見られる茶園では、中切りと組み合わせて防除を実施しましょう。

また、チャノキイロアザミウマやチャノミドリヒメヨコバイ等の害虫、炭疽病やもち病・黒葉腐病等の病害に対する防除は、二番茶の萌芽～開葉期に各地区の基準に準じて実施します。

ただし、一番茶摘採期間中の降水量が平年より多い場合は、遅れ芽の下葉に炭疽病が発生する場合があります。この場合は、刈り番収穫後、治療効果のある薬剤を散布しましょう。

4 チャトゲコナジラミ対策

県内でも本害虫発生茶園が、年々増加しています。左記項目に従い、チャトゲコナジラミの発生の有無を確認し、発生が見られたら成虫の発生が収まった7～10日後を目処に防除しましょう。

- ①成虫は新芽に群がるため、茶園の新芽を観察する。
- ②茶園のうね間にあるクモの巣などを観察する。
- ③摘採袋や製茶工場の生葉コンテナ周囲を観察する。

(竹田 博文)

◆しいたけ

1 本伏せ

今の時期は、急な温度上昇が発生することもあるので、ほだ木の温度・湿度の管理に注意が必要です。仮伏せ中のほだ木は、しいたけ菌の活着が確認でき次第、南または南東向きの、水はけや風通しが良い場所に組み替えます。

裸地伏せでは、直射日光による高温や乾燥を防ぐため、笠木を30～40cmの厚さでかぶせます。

特に、西日が当たる方向には、枝を長く張り出し、日が当たらないようにします。

林内伏せでは、落葉除去や下刈り、整理伐等により排水や通風を良くし、日陰が不足する場合は笠木等で補います。

2 ほだ場管理

高温多湿による害菌侵入等を避けるため、梅雨入り前に、防風ネット等の取り外しを行うとともに、ほだ場とその周辺の雑木雑草を刈り払う等して、通風促進を図ります。

また、害菌発生防止のため、害菌等の被害を受けたほだ木等の整理を行います。

(堀川 和也)

◆たばこ

今月は、わき芽除去、収穫、心止等の作業が集中します。計画的に段取り良く作業を実施しましょう。

1 旧下葉の完全収穫

下位中葉着位（旧下葉）は取り遅れがないよう、心止前に収穫し、それ以降の着位は、適熟葉収穫に努めましょう。

2 わき芽抑制剤散布

わき芽抑制剤は、わき芽の大きさ（米粒大～3cm以内）と天候に注意し、農薬使用基準を守って散布しましょう。

3 心止の注意点

心止は、地力や樹勢を考慮して、時期、深さを調整して行いましょう。曇雨天が続くときは仮止を行い、天気回復を待って止め直しましょう。病虫害を防止するため、心止後の花軸部は、除去したわき芽と同様にほ地外に持ち出し、適正に処理しましょう。

4 病害対策と農薬の適正使用

病害防除対策として、排水溝の完備、ほ地内外の衛生管理等、耕種的防除を徹底しながら、効果的な農薬防除に努めましょう。農薬を使用した際には、野帳・使用実績票へ記入しましょう。

5 異物混入防止

異物混入防止のため、ほ地でのマルチ片の回収と収穫、吊り込み、取り下ろし、及び荷造り後の葉元や包の確認を行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

5月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	葉いもち	並	補植用の取り置き苗は、葉いもちの発生源になるので、補植が終わったら速やかに処分します。 スクミリンゴガイの生息数が多いほ場では粒剤の水面施用を行います。施用に当っては水管理に十分留意し、水深が3cm程度になるように調整し、7日間はかけ流しや落水をしないようにします。
	イネズリウシ スクミリンゴガイ	並 やや少	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	やや少 並	アブラムシ類は各種ウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め、早めに防除します。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病	やや多 やや少 並	べと病の発生が多くなっています。べと病、褐斑病の発生を抑制するためには、施設内の換気を良くし、過湿防止に努めます。 うどんこ病は乾燥条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。 栽培終了時は、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマの拡散を防止するため、蒸し込み等により本虫を死滅させた後に残さを処分します。
	ミナミキイロアザミウマ 黄化えそ病 (MYSV)	並 並	
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	やや多 多 やや多	病害の発生が多くなっています。いずれも発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおき、罹病部位は極力除去してハウス外に持ち出します。 ヒラズハナアザミウマ、タバココナジラミの発生が多くなっています。害虫類は、気温の上昇とともにさらに増殖しやすくなるので、初期防除に努め、中～多発ほ場では7日間隔で少なくとも2～3回の連続した防除を行います。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ	やや少 やや多 やや多	
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病 すすかび病 うどんこ病	やや多 やや多 並 並	灰色かび病、葉かび病の発生が多くなっています。いずれも多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を十分に行うとともに、発病果・被害茎葉は、伝染源となるのでハウス外に持ち出し適切に処分します。病勢が進展してからの防除は効果が低いため、発生が少ないうちに早めに防除します。 タバココナジラミの発生が多くなっています。栽培終了時は、黄化葉巻病を媒介するタバココナジラミの拡散を防止するため、蒸し込み等により本虫を死滅させた後に残さを処分します。
	タバココナジラミ 黄化葉巻 (TYLCV)	多 並	
バレイショ	疫病	—	発生後は急激に進展し、まん延するので予防防除に重点をおきます。薬剤散布は、薬液が下葉に達するように十分量を散布します。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	ウメやモモなどの結実中の果樹類では、飛来に注意し初期防除を徹底します。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 灰色かび病	並 並 —	そうか病、かいよう病に罹病している枝葉は、発生源となるため徹底的に除去します。 灰色かび病の防除適期は落弁期です。また開花期から落弁期にかけての降雨は、本病の発生に好条件となるので注意が必要です。 ミカンハダニは、要防除水準(寄生葉率30%あるいは10葉当り寄生虫数5～10頭)に達したら速やかに防除します。
	ミカンハダニ	やや少	
茶	炭疽病	やや少	炭疽病の防除対策として、一番茶摘採後の基幹防除を徹底します。 カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマは、多発してからでは防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努めます。 クワシロカイガラムシの薬剤散布量は、成園で10a当たり1,000リットルを目安に、枝幹に十分かかるように丁寧に行います。また、激発園で、ふ化最盛期が一番茶後になる場合は、中切り更新して防除すると有効です。
	カンザワハダニ チャノココモンハマキ チャハマキ チャノホガ チャノミドリヒメコバイ チャノキイロアザミウマ ツマグロアオカミメ クワシロカイガラムシ	並 並 並 並 並 並 やや少	

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) 病害虫防除・肥料検査センターのHPアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。

